



システム再考

システム作り、あるいは、コンピュータの使い方には歴史がある。最初に、コンピュータに求められたのは、弾道計算だった。用途と道具から推測するに、あまり役に立たなかった、というところだろう。私らが、コンピュータを使って、という場合、弾道計算が参考になるアプリは思いつかない。

それより、国勢調査ではないか。第一に大量のデータであるからだ。作業は、次の国勢調査以前に終わらねばならない。終わらねば、とって、次回調査の直前では意味もない。

ところで、当初、使われたコンピュータは、こういう性能なら、世界に三台もあれば十分と言われたらしい。図体は大きく、収容には、大きなビルが必要だった。

今はどうだろう。世界に三台どころか、ひとりで三台といっても不思議ではない。そこへ、富岳の登場である。「二番ではダメなのか」という迷言で、失笑をかった代議士はともかく、現実は、ひとり三台でも足りない時代が来ている。

筆者の知る時代になって、コンピュータメーカーは、ユーザーのアプリを事務計算と技術計算の分野に大別した。だが、この分類が、ユーザーのニーズを満たしていたとは思えない。

事務計算は、事務所内の事務処理であり、技術計算は、工場、研究業務だが、それらは置いておく。

情報交換会

事務計算分野のユーザー会での出来事である。開発例として、発表された内容が、

現場では、秘密として、どうしても調べがつかなかったことが、堂々と発表されたのだった。聞いて納得するより、恐怖を覚えた。当社も、開発例として、発表していたからだ。こうなると、何が秘密で、何に触れていいのか、悪いかが分からなくなる。この実情を経営陣は知っているのか、と不安になる。

ライバルの手の内を知るのは、並大抵ではなく、知ると同時に、知られるという心配はつきまとうものだが、これらの競い合いを掻い潜って、掻い潜ることが仕事だといってもいいが、そういう心配をすることも一切なく、気楽に、得意げに発表する、という現実はどう評価したらいいのだろうか。

なかなか手に入らない情報が、システム部の、事務計算のグループで、開発アプリとして、功績として、堂々と公表される。聞いて驚かないのが不思議だ。こんなに簡単に必要な情報が手に入る、とは思わなかった。

当然、それを知った後、社外にアプリを発表することは禁止する。アプリの説明を聞くのは奨励する。

当時は、MISで煽られた時代だった。事務計画、経営計画、当然、社内秘に当たるものが、当然のこととして公表されていた。経営者が聞いたらどうするか。筆者の言う、システム部内で、データは、ゴミ扱い、という現象である。彼らが大切にするのは、プログラムであって、データではない。それは、各社共通であった。

MIS 万能論の陰で

事務計算の出発点は、企業によって異なるだろうし、これは、という開発順序もルールもない。筆者の記憶では、ほとんどが、デリバリーか、在庫管理から始まった。

技術計算は、担当外だし、専門外だったので、触れる資格もないので、割愛する。事務の機械化、コンピュータ化、システム化だと、いろいろ言うが、結局は、手作業の機械化であった。

コンピュータは、ありとあらゆる業務に使われる。単品の業務アプリの開発が進んで、対象アプリが減ると、単品アプリをつなごうとする。その集約が、MISだ。

恐いのは、ここからで、コンピュータの専門家は、MIS 万能を言いだす。MIS がなければ、いい経営が出来ない。出来なければ、企業が危うくなる。だが実際には、そうはならなかったし、MIS 自体が胡散霧消していった。原因のひとつは、パソコンの出現である。

環境が激変した。一つ目はコンピュータは安くなり、誰でも使えるようになったこと、二つ目は開発手順の変化である。メーカー主導のユーザー会は、論理的になる。ユーザー会の問題は現実的である。

極論すると、事務計算も、技術計算も、ディスクが実用化するまで、シリアルアクセス処理でしか扱えなかった。ディスクの出現で、データが、ランダムアクセスに扱えるようになる。

だが、論理的に、かつランダムにデータが扱える、ということは、コンピュータ導入時に混乱したのと別の意味で大混乱した。その訂正をしなければならないが、一向にその気配が見えない。アクセス方法の変化は、変化だけでなく、システムの在り方も変える。シリアルとランダムは、違うだけでなく、根本に影響するのだ。

当時、その変化を聞く術も、聞く方法も、答えの意味も、知る方法がなかった。そんな時、幸か不幸か、システム部門からはずれることになる。それはいいが、引き継げない。必要な引継ぎが出来ない、ということは、出来ない、ということだ。様子を見る以外、方法がなかった。悲しいが仕方がなかった。

GAFA 台頭の背景

今なら、その説明が簡単だ。各社のシステム部は、データ、情報を軽視してきた。つまりこれらを扱っていなかった。扱っているふりをしていた。

ディスクの使い方が分からないことが、その正体を証明する。ディスクの出現である。ディスクの使い方のランダムアクセスである。帳票から、台帳への移行である。

世界で高成長している企業として注目されている GAFA と称せられる企業群が注目されているが、残念ながら、その 4 社に匹敵する企業が日本にない。この事実と合わせて説明すれば、データ、情報に対する理解の差にあることが解る。

日本で、ハード、ソフトに目を向けている間に、彼らは、データ、情報、同時にデータベースに目を付けていたのだ。データシステムとは、データを扱うもので、それだけでいい。データがあるところに、人は集まり、人が集まれば、仕事出来る。

そういう考え方と、ハード、ソフトだけに興味があり、それ以外には無関心な人の集団との差である。もっと言えば、どんなハードが、ソフトが世に出れば、システムはどうあるべきか、にも興味がない。

多分、現在のデータ、情報、それに伴いデータベースに、どんな意味があるのか、にも興味がない。興味がないから行動しない。行動しないから、結果も出ない。そういう現象が随所に出ているのが現在の世界である。

コロナは大変だが、外出遠慮で、統計を採る。先週に比べて、何%減とか増、である。これについて、普段文句を言う人が文句を言わない。見られているのに、何も言わない。あなたの行動が見られているのにだ。携帯電波を見張られているのにだ。

アイファイブについても同様だ。アイの仲間に入れてもらえるとか、単純に嬉しそうそうに言っている評論家もいるが、その意味するところを知っているのだろうか。

道具導入の理解

政府も政府で、外出する人が減った、増えたで一喜一憂している。喜んでいただけ

でいいのか、と思う。

ハードもソフトも、時代とともに安くなり、便利になる。ただし、単に安くなれば問題のすべてが解決するというわけにはいかない。

こういうハードが欲しい、ソフトが欲しいと次々に使えるツール＝道具を求め続ける。しかし、それらの出現を待つ真の理由追求には、あまり熱心ではない。

今のハード、ソフトの計画では、実現できないことは何々、である。それは、ランダムアクセスが可能になれば、何々が出来る、という声は、筆者には聞こえてこなかった。ただ、ディスクを導入した、という声は、自慢げに言うのは聞いた。

とにかく、ディスクが出ただけでは事態は変わらない。筆者の独断だが、データの扱いに焦点があってれば、解決するが、ディスクというハードをいくら眺めても、何の解決にもならない。

何故か。

仕事に使うのは、情報であり、データである。事務の合理化もいいが、必要なのはデータの活用なのだ。そういう意味で、データ処理、事務処理は、人がする仕事である。事務計算の候補に給与計算の開発計画が当初の第一候補だった。

取締役会で説明の機会があり、かなり詳細な説明をした。ところで、給与計算の回数は、月に何度か、と問われ、返事に詰まった。月に一回だが、聞かれると返事が出来ない。妙な経験だった。答えた後、後はどうするのか、と問われたのを思い出す。コンピュータは、人は、次の計算まで、何をするの、である。

事務計算をめぐる

事務のコンピュータ化というが、その内容は何だろう。どうしたらコンピュータ化したことになり、コンピュータ化に、成功したことになるのか。

システム部が強烈なパンチを受ける事件が起こった。つまり、パソコンの出現である。ユーザーからすれば、わけの分からぬことを言うシステム部の連中と話をするよりも、自分でやったほうが速い、になった。

システム部に対する要求は急速に変わった。だが、その変化に、専門部所は気が付かなかった。何しろ、パソコンは、敵扱いだったし、排除すべきものだった。

あからさまに「パソコンは、システム化の邪魔モノだ」と、役員に直訴したシステム部長もいた。筆者ではない、念のため。そういうやり取りがあった、とある企業のシステム部長が、得意気に語るのを聞いたのだ。

パソコン導入に反対を直訴された役員もいた。直訴したシステム部長が得意気に語るのも聞いた。「どうだった」と聞いたのは筆者。導入を止めさせた、がその返事だった。

両者の違いは、開発方法の違いである。開発方法を変えるべく行動したシステム部は少なかった。

(FumioTAHARA)